

詩人の高村光太郎は、かつて「食うものだけは自給したい。これなくして真の独立はない」と言った。「食料を自給できない人たちは奴隷である」と警鐘を鳴らす人もいる。では、日本の食料自給率はというと、戦後一貫して下降を続け、先進国の中でも最低の37%にまで落ち込んでいる。にもかかわらず、有効な打開策が講じられないまま現在に至っている。

しかし、こここのところのコロナ禍による物流の停滞、中国による食料の爆買い、異常気象による不作での世界の食料供給の大幅な停滞、そしてウクライナ紛争の勃発という4つの非常事態が重なる状況により、クアトロ・ショックとなった。

自分の国を守るために農産物の輸出を止める国は、30か国にも上っている。食料を長らく海外に依存し続けてきた日本は、いよいよ現実を直視せざるを得なくなった。日本の豊かな食生活は、実は飢餓と隣り合わせであり、薄氷を踏むような危うい状況にあることを我々は理解しなければならない。

今回のことで、食料を海外に依存し続けることの危険性が明らかになった。これから、何らかの手を打たなければならない。ある自治体では、子どもたちの食の安全を守るため、国産の安心安全な有機米を買い上げ、学校給食で提供している。このような実践が全国へと波及していけばよい。

一人でも多くの消費者が国産の安心安全な農作物を食べることの重要性を理解し、行動を起こす必要がある。一人一人が食の安全についての自覚を高め、自分たちの命を自分たちの手で守っていくのである。一人にできることは微々たるものであっても、思いを同じくする人が手を取り合えば、その実践はやがて大きな渦となり、この食料危機を根本から解決する力になっていくかもしれない。

私が勤務する学校では、今年度から「残食0 学級で完食をめざそう」を掲げ、実践している。ささやかな取組ではあるが、栄養のバランスがとれた食事への意識高揚を図り、食への関心を高めるきっかけとしたいと考えている。

食料は、生きることに直結する。それは大人でも子どもでも同じである。なぜ、食料の値段が上がっていくのか、自分たちの口に入るものは、どこの国からきたものなのかなど、今まではあまりにも考えなさすぎた。

今の中学生が、社会に出て活躍する頃には、状況はさらに悪化しているかもしれない。考え、行動できる人材を育成しなければならない。それは、食料問題に限ったことではない。日本は、小さな島国だが、1億を超える人たちが生活している。イギリスやフランス、ドイツよりもはるかに多い人口を抱えている。食料を絶たればひとたまりもない。そんな状況が、すぐそこまで迫っているのかもしれない。そう考えると、背筋が凍りつきそうな思いになる。